

## 書評01

白石 昌則 著

### 『帰ってきた生協の白石さん』

講談社 / 2023 年 4 月刊 / 136 ページ / 1200 円 + 税  
ISBN 978-4-065-29035-4

評者：園田 華奈

日本大学大学院 生物資源科学研究科 博士前期課程



あの「白石さん」が帰ってきた！

「生協の白石さん」というワードを聞いたことがある、本を読んだことがある、という人は多いのではないだろうか。本書「帰ってきた生協の白石さん」は、2005 年、大学生協に対するご意見ご要望の投函に対し、返答を掲示する「ひとことカード」のやり取りを紹介した書籍「生協の白石さん」の続編である。当時は、東京農工大学生協職員だった白石さん（白石昌則さん：現在、日本生活協同組合連合会職員）。学生がやりとりをブログで紹介したところ、真面目かつユーモアあふれる回答で反響を呼び書籍化、ベストセラーとなった。

本書「帰ってきた生協の白石さん」でも、白石さんが質問？や要望？やお悩み？を受け取り、回答していく。構成としては、「令和の大学生からの質問 47」「平成の大学生（現 40 代）からの質問 57」コラムが 4 つ。平成の大学生「（現 40 代）」というのがポイントである。それはなぜか。2005 年、白石さんが大学生協で質問を受けていた「当時の」大学生だからである。令和（現在）の大学生と酸いも甘いも経験した平成の大学生（現 40 代）では、質問の雰囲気は全く異なる。

質問？や要望？やお悩み？と思わず「？」を付けてしまうのには理由がある。質問とも、要望ともいえぬような、果たしてそれは悩みなのか？と考える半ば大喜利のようなものも多いからである。例えば、令和の大学生からで

あれば、「入れると宿題が終わるファイルを入荷してほしい」「学食にロコモコが無くて困っている」等、ぎりぎり生協への要望？ととれるようなものや、「人間の魂の行き着く先を教えてください。」「授業中にメタバース空間に行ってしまう」等、哲学に片足を突っ込んだような質問もある。また、「バンドのボーカルに入っただけませんか？」というような「それ、白石さんに聞いてどうするんだ。」と思わずツッコミを入れたいくなるようなものまでさまざまである。その中でもに評者が面白いと思ったものは、『USB』は『指で差し込める媒体』の略称なのか、という問いに返して自身の「略語ジョーク」を返していたものだ。「帰宅部部長のことを『Go Home Quickly』の英訳から「GHQ」と省略し、『家っさー』として仕えていた」という返答である。

白石さんは昭和 44 年 6 月 9 日生まれという記載があるので、現在 50 代である。なぜ、年代の違う令和の大学生にここまで機知に富んだ返答が出来るのだろうか。その理由は 4 つあるコラムのうち、「寮生活への感謝」という白石さんの学生時代を記したコラムにヒントがあるように思う。このコラムでは、白石さんがかつて学生生活をしていた男子寮での日々を振り返っている。寮といっても食事などのサービスがあるわけではない、単に住むための自治寮である。今でこそ最重要視されるプライバシーなどは一切なく、個室はおろか、「誰からの電

話であるか」すらも、もれなく寮生にシェアされる。そのため、男子寮という特性ゆえだろうが、『『おでんわ』(女性からの入電)が十回を超えると、先輩方から簀巻きにされる不要不急のキャンペーンが発生する』というような文章がまた笑いを誘う。「個」の空間が皆無な寮での共同生活は苦手な人間と接することが不可避であろうと思う。実際に白石さんも「同じ寮でなければ関わらなかったであろう、うまいこと触れ合いを避けていた方達と接すると心穏やかでないこともあった」と振り返っている。しかし「避けていた方達」と触れ合った経験が、令和の若者に「家っさー」と返せる白石さんの面白さを形作っているように思える。

隔たりのない自治学生寮という、人と、多様な価値観と触れ合わざるを得ない状況で、「人に対する食わず嫌いが幾ばくか払しょくされた」「多種多様な若かりし人間の感性に触れられた」としている白石さんと、最初の本が出版されたときにそれを聞いて驚くでも案ずるでもなく、「上手いことやりがったな」「ずるいぞ、俺の方がもっと面白く書ける」と反応するかつての仲間達には全く老いを感じない。自治寮では自らスポーツ大会にバンド演奏会、女装コンテスト、はたまた駅伝など、様々なイベントが目白押しだったようで、仲間たちの反応を見ると本書の出版もそんな充実した日々の延長であるかのような感覚に襲われる。そんな暖かな感覚も束の間、「令和の大学生」からの「エビフライが喋る LINE スタンプしかもっていないのですが、仕事がうまくいくだろうか」という質問に「現状で『足る足る』』ということで収めてほしい」と返す。

「寮生活への感謝」とは打って変わって「コロナ禍直後の学び対応」と題のついた2つ目のコラムでは、白石さんがコロナ禍に直面したオンラインテストでの苦労が記される。これまで大喜利のようなやり取りを見てきたが、白石さんの社会人としての一面が垣間見えたような気が

がした。読者の記憶にも新しいであろうコロナ禍での出来事に触れた後、「平成の大学生(現40代)」との応答が幕を開ける。

「平成の大学生(現40代)」からは、「営業成績が頭打ちなので励ましてほしい」「肩が上げづらい」「娘から呼ばれなくなった」等、令和を生きる現代の大学生とは違い、お悩みが多い。そして、それらは否応なしに自身と他者、生活への接地感を催させる。白石さんのアドバイスや返答も「楽天カードマンに扮すればいい」「私は家族に頭が上がらないです」というようにウィットに富みつつ現実性を帯びてくる。中には学生さながらの抽象的な投稿もあるが、全体的を俯瞰すると本書にも書いてあるように社会にもまれ、他者を、または他者から見た自己を気にすることを余儀なくされている人々が見える。しかし、彼らに悲壯感とは思議と感しない。「何歳になってもモテたい」「不倫は文化だ」なんてページもあるせいかもしれないが、明確な言語化は難しい。ぜひ、この独特な空気に触れてみてほしい。

後半の2つのコラム「失礼な高橋さん」「背中を押してくれたもの」については、約18年前に最初の本が販売されたころに出会った高橋さんとの思い出と再会、転職に対する葛藤やその準備等、現在の白石さんに近づいてくる印象を受ける。本書では、白石さんの返答だけでなく、白石さんを構成する要素に触れることもできるのではないだろうか。

白石さんを知っている人も知らない人も、読書をよくする人もそうでない人も、ユーモアあふれる白石さんワールドに引き込まれることは間違いのない。手に取る際はぜひ、目次からどのような質問?等が繰り返られているか確認して見てほしい。一体、白石さんがどのような返答をしているか、楽しみながら読み進めることができるだろう。